

四国・九州・中国がヒンターランドになるとき 近畿の活性化は急加速する

2025年「首都新島」構想。その基本理念を展開する中、近畿の可能性、さらにはハイテク社会における真の豊かさとは何か。両氏に話を進めていただきました。●建設省近畿地方建設局長／萩原兼脩 ●建築家／黒川紀章



建設省近畿地方建設局 萩原 兼脩 局長
昭和8年生まれ、東京都出身。昭和32年東京大学工学部土木工学科卒。中部地建企画部を経て、大臣官房技術調査室長、河川局都市河川課長、近畿地建河川部長を歴任。昭和60年10月1日近畿地建局長に就任。

日本列島をおおう「首都新島」構想、金余りの今だからこそチャンス

萩原 先生が5月に発表なされた東京湾の「首都新島」構想、ずいぶん大きな反響を呼んでいますが、その基本理念のところからまずお話をさせてください。

黒川 この構想は「グループ2025」という、いろんな分野の専門家8人からなるグループが1年半ほど研究して得た成果を、5月22日に「東京改造計画の緊急提言」として発表したものです。緊急提言としたのにはいくつか理由がありまして、まず第1は首都圏の異常な地価高騰です。これは首都圏だけの問題ではなく、必ず地方に伝播していく。そういう危機感がありまして、一番の根っこである東京の土地問題を本格的に解決しなければならない、と考えたからです。地価高騰の理由はいろいろありますが、要するに土地の需要が非常に強いにもかかわらず供給が極めて少ない。これを解決するには、安い土地を大量に、しかも銀座から10分、15分の範囲内

に供給することが長期的にみて一番大事なことです。ということで東京湾に1億坪、500万人が住める人工島をつくる計画を提言したわけです。第2は、今日本は特に民間レベルで金が余っている。これは、必ず土地やマンションといった投機に向かうわけですから、政府が地価対策をいくらきちんとやってもどうにもならないと思うんですね。その余っている金を国土計画や都市計画に何百兆というスケールで吸収する。民間の金は必ず利回りを求めて動くものだから、放ついても集まってきます。概算ですが、上物(建築)はもちろん、新々幹線、空港、新港などを含めてこの構想の投資総額は238兆円とみております。

それだけの需要があるところでプロジェクトをやると、必ず利益・余剰金が生み出されています。それを地方へ回すわけです。この構想のベースになっている思想は、「地方分散」ということです。近畿との関連で言いますと、瀬戸内海の3本の橋をもっと活かすことを考え、四国—九州海底連絡トンネルを建設することで、大阪のヒンターランドを四国、九州、中国地域にまで拡大する。そうすると近畿の経済力はものすごい勢いで活性化できる、という研究結果が出ています。

今、地方の人々が望んでいるのは超大スケールのプロジェクトだ

萩原 近畿の未来は、それだけの超大スケールで考えていかなければならないんですね。ところで、新島構想発表の直後に政府の第四次全国総合開発計画が出されました。昭和75年を目標に多極分散型の国土建設を旨とするこの四全総については、いかがお考えですか。

黒川 私は四全総を高く評価しています。ただちょっと優等生の作文的な感じが気になるんですけどね。2000年までに1,000兆円をかけて日本列島をおしなべてよくするということが、はたしてその財源をどう確保するのか、またどう

いう順序で手をつけていくのか、そのあたりが明確じゃない。

私は今回の緊急提言の中で、地方大都市重点(傾斜)配分ということを提案しています。大阪、名古屋、さらに広島、福岡まで含めた地方大都市に思い切った公共事業の傾斜投資をする。つまり集積効果のある所へ重点的に配分することでリーダーとしての力を強化し、それによって地域全体を先へ先へと引っぱっていく効果が期待できるからです。

もう1つには、地方でのビッグプロジェクトを盛り込んでほしいことです。関西の場合ですと、3本の橋、新空港、京阪奈都市に続くもの。しかも四国、九州、中国まで含めたスケールのかいプロジェクトがほしいと思います。

21世紀、首都概念は点から線へ 情報化時代に対応する首都回廊とは

萩原 大阪は昔から東京に対抗意識を持ってきましたし、日本の国土機能上、双眼構造が望ましいという論も実際ありまして、大阪としては双眼の1つでありたいと願うわけですが、この東京対大阪という対比論は今後も続くものではないか。

黒川 より個性的な関西をつくっていくという意味では、東京への対抗意識はプラスになると思います。ただ、古い意味での2眼レフ論というのはあまり効果がない。

というのは、21世紀になると複数の都市が結ばれて首都機能を分担する時代に入るとみているからです。新島計画の中でも「首都回廊」という新しい概念を提案したのですが、東京から神戸までの太平洋沿岸ベルト地帯が首都回廊として一番有利な条件を持っています。ただし、3つの条件が満たされなければならない。回廊の範囲内は1時間で結ばれること、最低3つの24時間空港があること、情報ネットワークで結ばれることです。東京—大阪間はいずれリニアモーターカーが導入されて1時間で結ばれるのは



P-O-P materials serve the retailer as well as the customer. They organize product lines; call attention to price promotions; highlight cross merchandising ties between related products; introduce new products; packaging and sizes; and generate excitement and product sales through sweepstakes, refund and premium offers. P-O-P signs and displays are created for long-term (permanent) use, or short-term (temporary) use. Permanent, as compared to temporary, P-O-P units are designed to be restocked and to have a lifespan that ranges from six months to several years. They are generally made of wood, wire, metal or more expensive plastics. Temporary signs and displays are those promotional units which are eliminated after their stock has been depleted through sale, and/or units designed for use for six months or less.



建築家 黒川 紀章氏
昭和9年名古屋生まれ。32年京都大学建築学科卒業。39年東京大学大学院博士課程修了。主要作品としては国立民族学博物館、国立文楽劇場がある。その他、海外での活躍もめざましい。

確実ですから、あと房総沖と中部地域に24時間空港をつくるが必要になってきますね。このような首都回廊という位置づけで大阪を見ると、さらに九州までをヒンターランドとするスケールで見ると、大阪の未来は悠々たるものだと思います。

萩原 今よく言われていますが、情報化が進んだため再度首都集中が始まっているという現象も、首都回廊という視点から見ますといずれ解消されるものではないでしょうか。

黒川 情報化時代になると再び都市の時代になるということは基本的に正しいと思います。ただそのことだけで話をすませるのはまちがいです。都市が持っている経済的なパワー、これが集中化を加速する最大のファクターですから、そのことがわかった上で、集積効果の高い地方都市に傾斜配分をして経済力を高めることが問題解決につながってきます。

最先端技術に囲まれた日本人は 真の豊かさをどう 選択するか

自分らしい生き方、個性的なライフスタイルの確立の中でこそ、人間は科学技術と共存できる。無個性、無思想からは真の豊かさは生まれない。

国際化・技術の進歩で増える余暇 サラリーマンはうまく対処できるか

萩原 四全総では、これまでになく国際化の方向がはっきり打ち出されていますが、日本人にとって国際化とはいったいどういうことなのでしょう。

黒川 まず1つは、日本の人口だけを対象に国土計画を考える時代は終わったということです。私どもの試算では、2,000年の時点で外国人定住人口はすでに300万人になると予想します。もう1つは、日本人が世界時間を持つようになることです。現に日本人の生活や経済は為替レートで動いていますから、サラリーマンのレベルにまで世界時間は浸透してきています。わかりやすく言えば、24時間都市になるということです。そして最後は、文化的同時性と呼んだけれいかとおもいますが、文化情報の相互乗り入れです。今、日本は抽象的なレベルではなく、情報の発信、企業の国際的な経済活動、そして外国人の定住、そういうあらゆる側面で国際化が現実に行進しています。

萩原 国際化の問題とからんで、日本人の余

暇のあり方が問題になってくると思います。経済摩擦の1つに、日本人は働きすぎだという非難もあるくらいですから。すう勢的には余暇時間は増えていくでしょうが、将来その活用の仕方はどんな方向へ向かうでしょうか。

黒川 労働時間に対する余暇時間で見ると確かに欧米と比べて少ないですが、実は家族一人一人の余暇時間にすると、たぶん日本はトップに近いんじゃないでしょうか。というのは主婦の余暇時間が統計に入っていないからです。家庭電化製品の功績で、今や日本の主婦は世界のトップクラスの余暇時間を持っています。で、主婦は今何をしていますか。勉強してますね、カルチャースクールで専門的にね。一方亭主の方は通勤電車でスポーツ新聞を読むのが精一杯。勉強しませんから差がつかましたね。今や女性がインテリになって余暇を楽しんでいる時代です。日本の場合、余暇の問題は最後に残されているサラリーマンの問題ではないかと思えます。サラリーマンの余暇時間もしだいに増えてきていますが、ただ欧米型のようににはならないだろうと思えます。日本は国土が狭い中に交通網が発達していますから、チョコチョコ行ったり来たりした

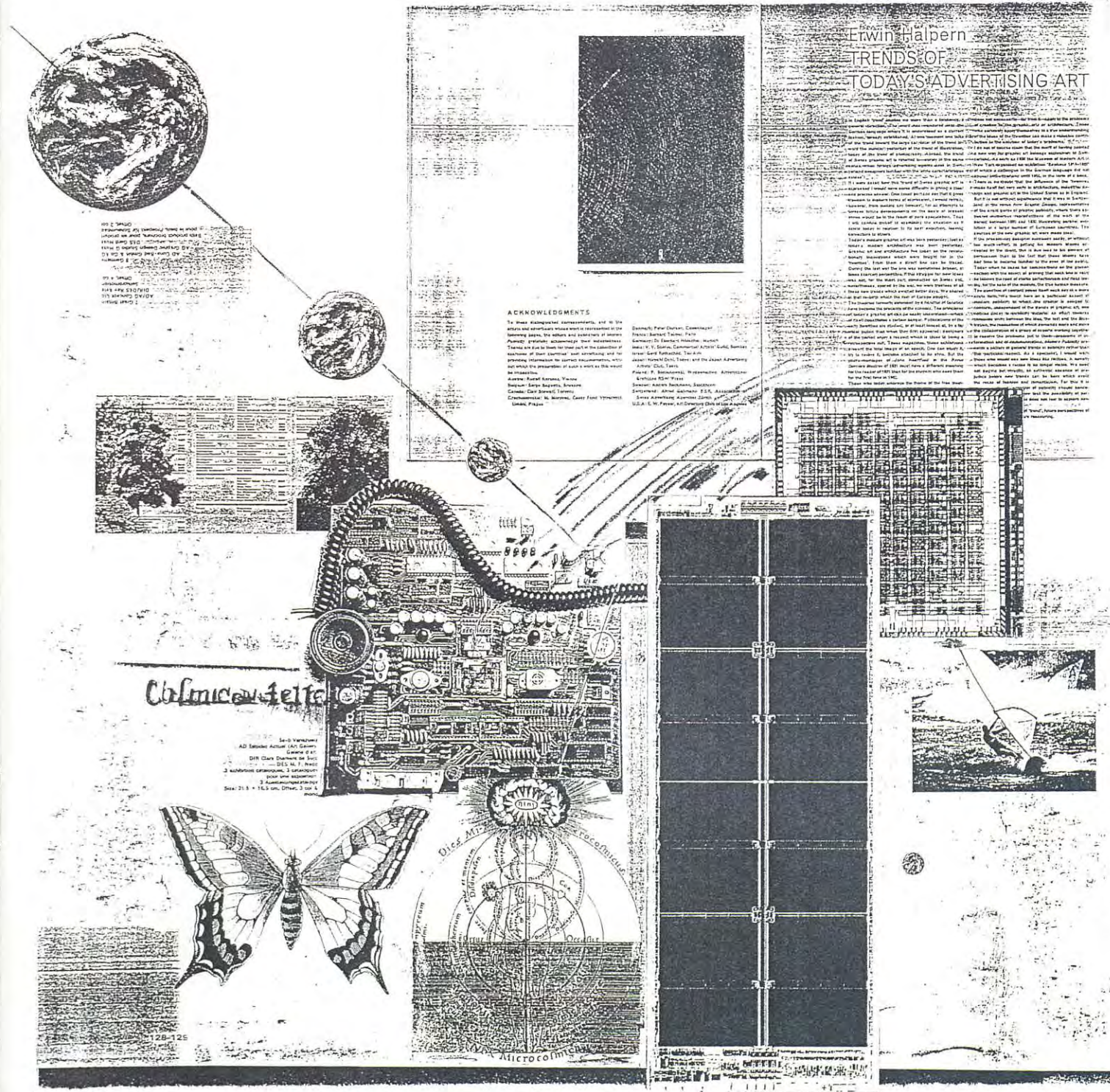
っていいわけです。むしろその方が理想的で、これからは労働時間と余暇時間をはっきり分ける時代がだんだん終わるだろうと考えます。労働の中に余暇時間をこきざみにまぜて、労働そのものをもう少しリラックスしたものにしていく。労働と余暇をスパッと切って分ける、という考え方が古いものになってきつつあります。

萩原 そうなりますと、どういうレジャー施設が成り立つことになりますか。

黒川 身近な部分でリラックスできる空間をふやすことの方が、日本では重要だと思います。たとえば都心にポケットパークのような小公園をたくさんつくる。そこに1枚ずつでもいいからテニスコートなりスカッシュコートがあり、プールがある。で、会社の休み時間にひと泳ぎしたり、テニスで汗を流してシャワーをあびて再び仕事にもどる。今、こういうことできないですね。仕事のまわりは仕事の雰囲気がかたまっていますから。こんな風にサラリーマンが手近なところでスポーツをしてリラックスできるためには、まず環境作りが先じゃないかと思えます。長期滞在型の施設もしだいに整備されていきますし、特に海に関連したものは急速に整備されるでしょうね。日本はこれだけ海に囲まれているながら、ヨットハーバー1つとっても不足していますから。

萩原 そうですね。新島構想の中でもヨットハーバーについての言及がありますね。

黒川 ええ。新島には全域に網の目のように運河が流れ、建ち並ぶマンションにはすべてヨットハーバーが付きます。サラリーマンたちは休日になると自分のヨットで釣りに出たり、ショッピングや映画をみに行くことができます。それに房総海岸や多摩川・荒川・江戸川にも、その気になればヨットハーバーはいくらでもつくれますから、これからは海のリゾートは有効だと思うんですけどね。このように大規模型と日常型・職場型を同時に整備していくことが21世紀のリゾート開発、レクリエーションになっていくんじゃないかと思っています。



高度な「社会的技術」を習得した時、自由と豊かさが選べる

都市化がひきおこすさまざまな社会問題。それを解決する「技術」を1人1人が身につけたとき、人間らしい暮らしのできる街づくりへと人々のコンセンサスは結集する。

家庭に入ってきた最先端技術 振り回されると不幸が始まる

萩原 家庭電化製品が主婦の余暇時間をふやしてきたように、科学技術の進歩は人々の暮らしに物質的・時間的な豊かさをもたらしました。今後21世紀に向かってますます社会がハイテク化していくなかで、科学技術と人間のかかわり方はどうなっていくとお考えですか。

黒川 たとえば私の場合、外国から仕事の依頼を受けますと図面をファクシミリで送ってしまうわけです。現地に行かなくても仕事ができるということで、世界中で仕事をするのがラクになりました。こういうことはあらゆる生活の中で言えることで、1人1人の自由にできる時間がふえてきたわけです。このふえた時間を自分なりの使い方ができるかどうかは今後大きな問題になると思います。

こんな話があるんですが、あるアメリカ人が日本の政治家・財界人にインタビューしました。「高度経済成長をとげて、日本はこれからどんな国家目標を持っているのか」「あなたはどのような趣味を持っていて、どんな人生を送ろうとしているのか」と。この質問に対して政治家も財界人も答えることができなかったというんですね。「自分らしい人生はこうなんだ」「個性的な人生を送りたい



い”こういう考え方が今の日本にはないんですね。萩原 技術の発達、日本全体をあまり豊かにしましたが、同時に人間も画一的にしまったということですね。

黒川 20世紀初頭は、機械、技術は人類全体を幸せにするという確信がありました。だから新しい技術や機械が登場すると古いものは切り捨てて全部新しくしてしまい、それを世界中に普及させました。しかし今はちがいます。たとえば原子力発電ですが、これが全世界に普及するのがよいのかどうか。ある所では水力発電が適しているだろうし、別な所では火力発電の方がよい、というように技術にもローカライゼーション、文化とのインターフェイス、個性があるわけです。ですから全体としてはいろんなレベル・種類の技術が共存する中で、自分のライフスタイルやその時の気分によって技術のレベル・種類を選択できることが、本当の豊かさにつながるものだと思います。たとえば旅行するのに、今年はジェットで行くが来年は船にしようとか、今度は高速道路で車をとぼすが、次は夜行列車にしてみようとか。こういう風に自分なりの選択ができる社会は豊かな社会だと思いますね。昔とちがって、今は情報技術やコミュニケーションの技術といった科学の最先端の分野が家



庭の中に入ってきます。その時、技術に対する自分の個性的な思想とか使い方をきちんと持っていないと、逆に技術に振り回されてしまう危険さもあるということです。また社会システムとしても、古いものと新しいものを共存させる多重構造のシステムに変えていかなければなりません。

技術が自然風景と重なる時都市は 明るい未来を持つ

萩原 今まではAかBかの選択だけだったのが、これからはAもBもある中で、自分の個性に合わせて選択する時代ですね。

黒川 我々が都市問題を扱う時は最先端の技術を駆使して再開発をするんですけど、もともとそこにあった人間関係やコミュニティの問題、あるいはおじいさんやおばさんが新しい技術となじめるかどうか、というようなさまざまな社会的問題が生じるわけです。このような社会的問題を解決する技術、これは「社会的技術」と呼んでいいと思いますが、都市をよくして人間らしく暮らしていくために不可欠のものとして、今後ますますクローズアップされてくるでしょう。ですから、超高層マンションの中で住むことだけを学んでも、決して良い街にはならないということです。たまには超高層の隣の

木造家屋で、夏ならカヤをつけて楽しむ。こういう技術が社会的技術なんですね。つまり、社会的技術とは、機械を第2の自然として都市の中に取り入れ、それによって人間が豊かに生きていくためのノウハウだとも言えます。自然という感覚も最近変わってきたな、と感じます。人間がつくり出した機械を擬似自然として感じるような世代がどんどん生まれてきていますから、自然と機械の境界領域が消えていく新しい時代がもうすぐ始まる、という予感がします。とはいえ、現段階では社会的技術はまだまだおくれています。私どもの新島計画のように、東京湾を浄化しながらサラリーマンの住める島をつ

くることは技術的には可能ですが、都市をつくる、環境をつくるというのはコンセンサスですからね。それをつくり出していく社会的技術を、これからはどんどん高めていかなければならないと思います。萩原 技術や機械を自分の個性で選択し、そして使いこなしていく。そういう社会的技術の習得の中から、よりよい都市づくり、環境づくりのコンセンサスも生まれてくるということですね。今日はどうもありがとうございました。

